**小高根　次郎（おだかね・じろう）**

**１、プロフィール**

詩人、作家、文芸評論家。旧制弘前高校、東北帝大卒。戦前は保田與重郎らの「コギト」、立原道造らの「四季」に加わり、詩人伊東静雄らと交流。戦後は同人誌「果樹園」主宰。

＜生没＞

1911（明治44）年３月10日　～　1990（平成２）年４月14日

＜代表作＞

『詩人、その生涯と運命－書簡と作品から見た伊東静雄』

＜青森との関わり＞

旧制弘前高校在学。棟方志功研究者としても知られる。同人誌「果樹園」に棟方志功の評伝などを連載した。

**２、作家解説**

東京生まれ。高校時は画家を志し、棟方志功に師事。東北帝国大学に進み、昭和９（1934）年卒業。日本レイヨン勤務の傍ら、保田與重郎、田中克己らの「コギト」、堀辰雄、三好達治らの「四季」（第２次）に加わり、詩を発表。詩人の伊東静雄や蓮田善明、立原道造らと交流。昭和16年、処女詩集『はぐれたる春の日の歌』をコギト発行所より出版（装幀棟方志功）。ついで昭和18年、小説集『浜木綿の歌』（小学館）を上梓。戦後は池田市に居住し、昭和31年より文芸誌「果樹園」を主宰、伊東の書簡を蒐集し、彼の伝記を連載した。これは伊東の全集が未刊行だった当時貴重な資料であり、伊東研究の先駆的な基礎文献となった。また青森出身の版画家棟方志功の伝記も連載、企業小説も書いた。『郷愁に愛と夢とを』（臼井書房昭和22年）、『棟方志功その画魂の形成』（新潮社昭和48年）、『湧然する棟方志功』（新潮社昭和49年）、『歓喜する棟方志功』（新潮社昭和51年）、『総務部長憤死す』（日本経済新聞社昭和53年、徳間文庫平成元年）、『再建腕くらべ』（日本経済新聞社昭和56年）、『会社再建腕くらべ』（徳間文庫平成２年）、『吉井勇－英雄歌人の黙契』（沖積舎「作家論叢書」昭和59年）、『足穂入道と女色小説集』（雪華社昭和60年）、『歌の鬼・前川佐美雄』（沖積舎「ちゅうせき叢書」昭和62年）他。編纂に『伊東静雄全集』（全１巻、桑原武夫、富士正晴共編、人文書院昭和41年、増補改訂版昭和55年）、『蓮田善明全集』（全１巻、島津書房平成元年）。小高根の業績は何と言っても『伊東静雄全集』の編纂をはじめ、『詩人、その生涯と運命』を著すなど、伊東の文学をその書誌的整理から作品研究まで手がけ、その後の伊東や「四季」「コギト」の詩人たちの研究に道を開いたことである。生前の伊東と親しかったという事実だけでなく、小高根自身が詩人であったことがその論考に奥行きを与えている。この詩人としての感性こそ「果樹園」を長らく刊行し続けることができた根源であろう。同時にそれは、生き残った者が捧げなければならぬ、先立った詩人たちへの鎮魂の誌でもあった。「果樹園」は合本となって青森県立図書館にも保管され、閲覧可能。

**３、資料紹介**

〇『詩人、その生涯と運命－書簡と作品から見た伊東静雄』

図書

1965（昭和40）年５月10日

220mm×160mm

伊東静雄の書簡、日記を作品と関連づけながら、伊東の詩業の伝記的・精神的軌跡を詳細に跡づけた労作。雑誌「果樹園」創刊号から長く連載されたものを一冊にまとめたもので、伊東の伝記的史実が明らかにされている上に、抒情性の由来をも知ることができる。